

# 幼児期の教育・保育に対する親、保育者の考え方 に関する調査

井 口 均

## The Comparative Studies of Parents' and Teachers' Opinions Concerning Early Childhood Educations

Hitoshi INOKUCHI

### I はじめに

幼児期に獲得させる力は、遊び経験を通しての方向目標として示されることが多く、幼児期の発達の特性や生活および活動に関する具体的内容は、それでも曖昧なものにされてしまうことが多い。小、中学校では「学力」だけの評価をやめ、意欲や態度に目を向けた評価が実施されている。自主性、自発性の形成を中心的課題に据えた結果、活動に取り組む意欲や態度に重点が移り、具体的な知識や技能を主要課題から引き降ろした。具体的な知識、技能は自主的な活動によってもたらされる副産物という二次的なものに置き換えられたのである。それによって、幼児期は小学校で必要となる知識や技能よりも、自発性や自己統制力を養うべきであるという見方を強めている。こうした現状の中で、就学前の教育・保育内容を到達目標的視点から具体的に考えていく実践が一層困難な状況になっている。

教育・保育内容を具体的に考えていく一つの糸口として、保育者、保護者、教師へ調査を位置づけ、前回、拙稿<sup>1)</sup>において調査内容の検討を行なった。今回はその内容を踏まえ、いくつかの内容について、実際に保育者と親を対象に調査検討を行なう。基本的には、保育に対する期待が何かを明らかにするため、現在の子どもの発達状態、就学前と小学校とのつながりについての考え方、さらに幼児期の特性等に対する見方等を比較検討する。

### II 方 法

#### 1. 調査対象者

##### (1) 保育者

幼稚園教諭は長崎市内の公立A幼稚園の5名と私立B幼稚園の9名で、保育所保育は同じく長崎市内の公立B、D保育所の22名と私立E保育所の18名で計54名である。各園の園長、担任（嘱託含む）、補助に回答を求めた。年代別にみると、20代が14名（26%）、30代が19名（35%）、40代が17名（32%）、50代が3名（6%）となっている。

各園は町中の住宅街や商店街の一角にあり、自然環境や敷地面積等で必ずしも恵まれているとは言えないが、各園とも様々な工夫を行なっている。保育内容面では、自由遊びを共通して重視しており、外遊びを中心に身体づくりに取り組んでいる。1園だけではあるがモンテッソーリ教具による遊びを保育の中に一部取り入れている。

## (2) 母親

各園の年長組の保護者(母親)全員に回答を求めた。回答者数は公立A幼稚園が56名、私立B幼稚園が43名、公立C、D保育所が35名、私立E保育所が29名で、計163名である。平均年齢は35.2歳で幼稚園と保育所間の年齢差はほとんどみられず、それぞれ35.4歳と34.9歳である。父親の平均年齢は全体で38歳である。

園(所)に通わせている子どもの兄弟の有無と年齢で分類すると、就学前の子どものみを持つ母親は83名(内、兄弟無し:29名、他に1人いる:44名、他に2人いる:10名)、小学校3年生までの子どもを持つ母親は48名(内、他1:37名、他2:11名)、小学校4年生以上の子どもを持つ母親は32名(内、他1:12名、他2:18名、他3:2名)である。

## 2. 実施日時および回収率

H7年7月3日から6日にかけて配布し、7月26日に回収した。回収率は、保育者が79.4%、母親が83.2%である。

## 3. 調査内容

今回調査した内容は次の7つである。1)就学までにつけさせたい力、2)子どもの発達状態の評価(1)と同じ発達内容)、3)園(所)の保育活動に対する見方、4)入学後の成績差の原因に対する捉え方、5)幼小一貫性に対する考え方、6)幼児期の保育の重点課題に対する考え、7)幼児期の発達の特徴に対する見方である。

各質問に対する選択肢は4段階で重みづけられ、その中から選択回答するようにした。例えば、非常に大切、かなり大切、少し大切、必ずしも大切でない、といった選択を設定し、数量化に際しては順に、3、2、1、0点とした。

就学までにつけさせたい力に関する質問は43項目。意欲や態度に関するものから、イメージ力、感情表現力、対人関係、学習技能、文字・記号の読み書き、数の理解、基本的な生活習慣、ことばによる会話・伝達・理解、挨拶・返事、興味・関心等について聞いている。

発達状態の評価に関する質問は、就学までにつけさせたい力に関する質問項目と全く同じものを用いている。

行動傾向に関する質問は14項目。自己統制力、甘えや共感力、親和力、積極性、他者評価に対する感受性、自信の度合い等について聞いている。

園(所)の保育活動に関する質問は10項目。小学校教育との関係、園(所)の責任範囲、個々の子どもへの関り方等を中心に聞いている。

幼小一貫性に関する質問は7項目。小学校での教育内容・方法上の問題、園(所)での事前準備、意欲・態度、保育者の姿勢、体力・運動技能、幼小間での情報交換、活動スタイルの同一化等について聞いている。

入学後の成績差の原因に関する項目は12項目。興味・関心・好奇心、文字、根性、塾、親の配慮、素質、園(所)での教科練習、自主性、友達関係、自信等について聞いている。

幼児期の保育の重点課題に関する質問は13項目。微細・粗大運動能力、表現力、集団生活力、情緒の安定、チャレンジ精神、自己主張の力等について聞いている。

幼児期の発達の特徴に関する質問は8項目。個人差、自発性を中心に聞いている。

### Ⅲ 調査結果

#### 1. 傾向分析

##### (1) 入学までにつけさせたい力—発達期待について—

共通点をまずみてみると、図1、2は保育者と母親からの期待度が高い発達項目を上位のものから序列化したものである。2.5以上の高い平均点を共通にとっているのは、感情表現力に分類されるno.9（発見に対する驚きや喜びの表現）、返事・挨拶に分類されるno.38（名前呼ばれて返事）、no.39（保育者、友達への挨拶）、no.40（はい、いいえの返事）である。図3、4は逆に期待度が低い発達項目を示したものである。1.0以下の低い平均点で共通している項目は、数の概念に分類されるno.27（合計が10までの足し算）とno.28（10を2つの数に分解）である。保育者や母親は感情表現力や日常生活での返事・挨拶に対する期待度は高いが、計算力の基礎となる数の基礎概念については期待度が明らかに低いことを示している。2.5未満ではあるが共に上位にあるのは、自己統制力に分類されるno.32（保育者の説明をよく聞いて行動）、no.43（人の話しを落ち着いて最後までよく聞ける）であることを考えると、保育者や人との関りで求められる自己統制力や好奇心に対する期待度も、共に高い傾向にあると言える。

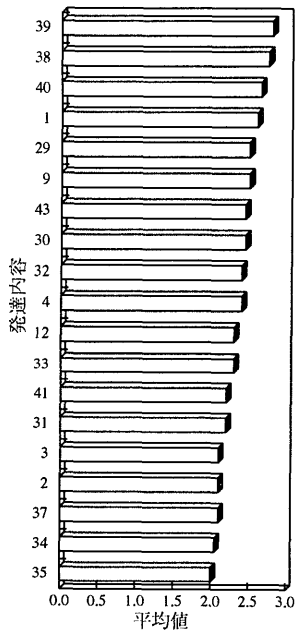


図1 全保育者において期待が高い発達内容(2.0以上)

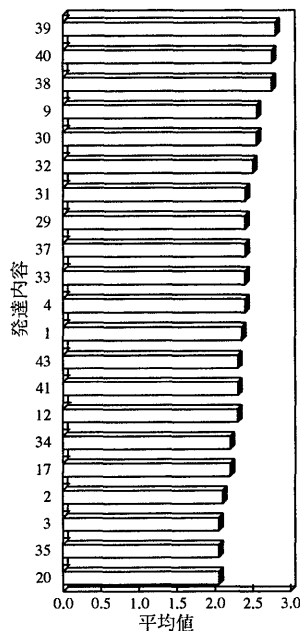


図2 全母親において期待が高い発達内容(2.0以上)

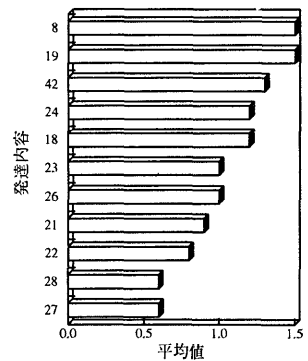


図3 全保育者において期待が低い発達内容(1.5以下)

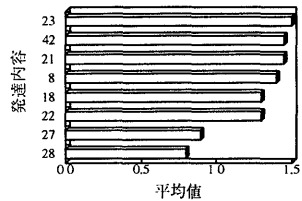


図4 全母親において期待が低い発達内容(1.5以下)

相違点については、必ずしも明確ではない。強いて指摘するならば、保育者の場合、意欲・態度に分類されるno.1（1日の生活に対して意欲的かつ活動的に取り組める）への期待度が母親より高いことから、期待度がより高いと見做せなくもない。さらに保育者では、文字や記号の読み書きに分類される、no.21（平仮名文を読んで理解）、no.22（50音の平仮名全部書ける）、no.23（自分の名前や簡単な文を平仮名で書ける）が1.0未満と非常に低く

なっている。しかし、確かに母親の期待度も低いが、それでも1.5程度を示しており、保育者ほど低いわけではないと指摘できる。保育活動の中で保育者が子どもに願うのは、自分の課題(めあて)をしっかりと持ち、1日の生活全体の流れを自らつくりだし、かつ工夫していけることである。そうした願いが意欲・態度へのより高い期待度をもたらしていると考えられる。

保育者の年代別変化を図5, 6, 7でみると、各年代において共通して2.5以上の高い期待度を維持しているのが、返事・挨拶に分類されるno.38(名前・返事), no.39(挨拶), no.40(はい, いいえ)である。no.1(一日・意欲)とno.9(発見の驚き・喜び)は年代間で変動がみられるが、実際は2.5に近い平均値を各年代でとっており、変動のもつ意味はほとんどないと考えられる。一番はつきりしていることは、年代が上がるに従い、項目数が4項目から5, 8項目と増加することである。その内容は、返事・挨拶の「日常の挨拶, 返事, はい・いいえが言える」こと他に、no.29(身の回りの始末—学習道具準備, 着替え, トイレ, 給食), no.30(自分の持ち物を決められた場所に整理), no.32(説明・行動)といった生活行動の自立への期待が加わっている。こうしてみると、保育者は、遊びでの

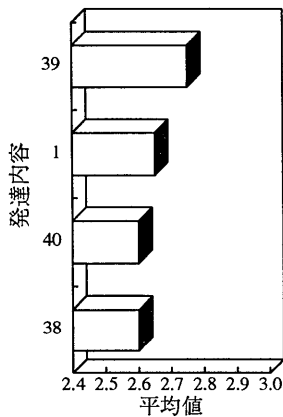


図5 20代の保育者の期待が非常に高い発達内容(2.5以上)

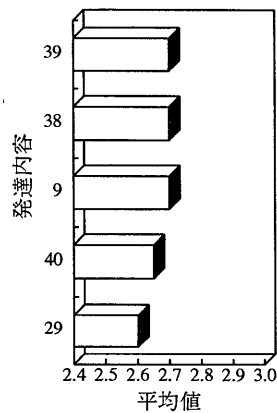


図6 30代の保育者の期待が非常に高い発達内容(同)

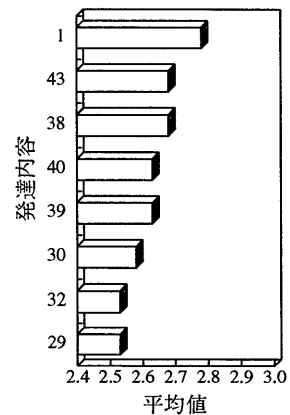


図7 40代の保育者の期待が非常に高い発達内容(同)

豊かな感情表現力や意欲・態度面の発達と、返事・挨拶への期待度を一貫して強く持っており、年代が上がるに伴い、日常生活活動での自立への期待度が付け加わる傾向にある。

母親については、図8, 9, 10に示されている3つのグループに分類して検討した。就学前の子どものみを持つ母親と小学校4年生以上の子どもを持つ母親間で2.5以上の高い期待度を示す項目数が多く、それぞれ9, 3, 7項目となっている。内容は、まず3つのグループに共通したのものとして、返事・挨拶に分類されるno.38(名前・返事), no.39(挨拶), no.40(はい, いいえ)があげられる。就学前のみと小学校4年生以上の子どもを持つ母親の間では、さらに感情表現に分類されるno.9(発見の驚き・喜び), 自己統制力に分類されるno.30(持ち物), no.32(説明・行動)が共通して2.5以上の期待度を示している。しかし、小学校以降の子どもを持つ母親では、同じ自己統制力に分類されるno.31(決まり, 当番), no.33(はっきり話す), および返事・挨拶に分類されるno.37(名前・住所)への期待が低下し、その一方で、no.29(身の回りの始末)への期待が新たに高まる傾

向にある。こうしたことから、母親は子どもの年齢が低い時から、遊びでの豊かな感情表現、日常生活で挨拶、および自己統制としての持ち物の整理や説明を良く聞いて行動する等に高い発達期待を持っている。しかし、高学年の子どもをもつのに伴い、決まりを守ったり、当番の仕事をきちんとやるといった役割行動やはっきり話したり、挨拶することへの期待が低下する一方で、日常生活活動での自立への期待度が高まる傾向にあると考えられる。

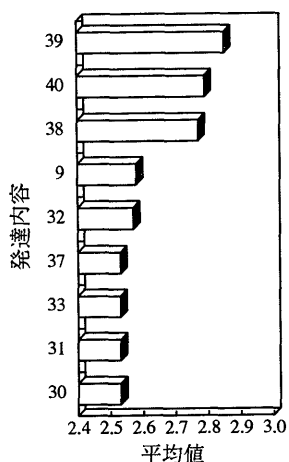


図8 就学前の子どものみがいる母親の期待が非常に高い発達内容 (2.5以上)

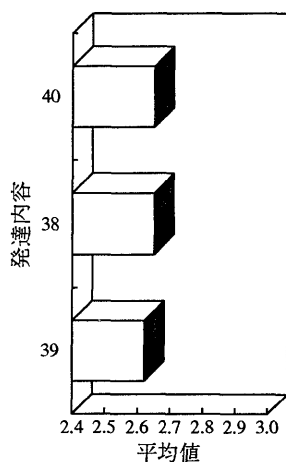


図9 小学校3年生までの子どもを持つ母親の期待が非常に高い発達内容 (同)

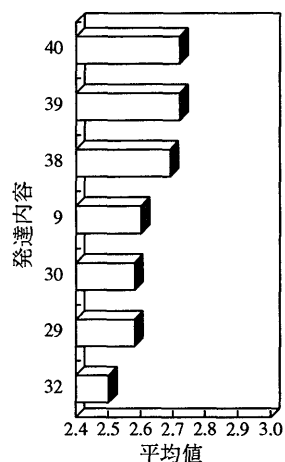


図10 小学校4年生以上の子どもをもつ母親で期待が高い発達内容 (同)

## (2) 子どもの発達状態の評価について

発達状態の評価に対しては、多くの保育者からの回答が得られなかったため、保育者と母親の比較を行なうことができなかった。そこで、保育所に子どもを通わせている母親と幼稚園に子どもを通わせている母親との傾向比較を行なった。

まず保育所と幼稚園の比較であるが、図11、12に示されているように、保育所に子どもを通わせている母親が平均2.0以上の評価を行なった項目数が非常に少ない。母親の主観的判断に基づく曖昧さはあるが、2.0という点は達成率が50~74%と判断したことになる。保育所の母親がそのレベルに達していると判断したものは、43項目中5項目だけである。no.7 (遊びの中で想像したものになりきって楽しくふるまう)、no.9 (遊びの中で何か発見した時、驚きや喜びを素直に表現できる)、no.25 (5までの数がすぐ数えられる)、no.38 (自分の名前を呼ばれた時返事ができる)、no.39 (保育者や友達と日常の挨拶ができる)の5項目である。イメージ力、感情表現力、数概念、返事・挨拶等の一部分ということになる。それに対して、幼稚園の母親が達成率が50~74%以上と判断した項目数は18項目であり、全項目の約40%を占めている。発達領域でも、意欲・態度と好奇心以外の領域、イメージ力 (1項目: no.7)、感情表現力 (1項目: no.9)、対人関係 (1項目: no.17)、基礎技能 (2項目: no.19, 20)、文字 (1項目: no.24)、数概念 (2項目: no.25, 26)、自己統制 (3項目: no.29, 30, 31) 話す・聞く・伝える (2項目: no.33, 34)、返事・挨拶 (4項目: no.37, 38, 39, 40) の各領域に万遍なく分散している。このような評価の偏りがどうして生じたのかは、今回の資料から明らかにすることができない。念のため、

評価が低い項目数について検討したところ、やはり保育所の母親の場合、平均1.5以下の項目数が25項目に及んでいた。この中に入っていないのは、日常生活活動での自立と話す・聞く・伝える力に関するもののみであった。

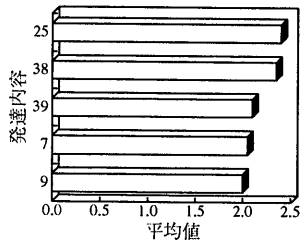


図11 母親(保育所)の評価が高い発達内容(同)

保育所と幼稚園と母親による発達評価の極端な違いについては今後さらに検討する必要がある。また期待度と発達評価間に予想されるパタンについても、保育所と幼稚園の母親との間で評価が違いすぎたので未検討のままである。第1のパタンは発達評価での到達レベルが高く、なおかつ期待度も高い項目(=現実的期待)で、第2のパタンは、発達評価での到達レベルは

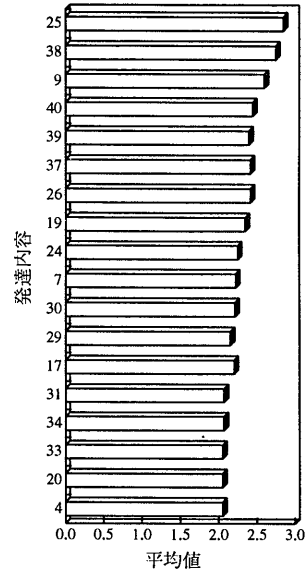


図12 母親(幼稚園)の評価が高い発達内容(2.0以上)

必ずしも高くはないが、期待度高い項目(=理想的期待)である。この2つのパタンで取り出される発達内容が幼児期の発達の理解の具体的解釈と捉えることができる。例えば、今回の得られた幼稚園の母親のデータを検討した場合、第1パタンとして分類される発達内容は、図13によると、no.

9, 37, 38, 39, 40といった項目がそれに相当する。同じく第2パタンとして分類される発達内容は、no. 4, 32, 41, 43である。参考までに第2パタンの項目をみると、no. 4は「興味をもち自分から取り組むこと」、no.32は「説明をきちんと聞いて行動できること」、no.41は「わからないことは自分から聞くこと」、no. 43は「人の話しを最後まで落ち着いて聞けること」である。

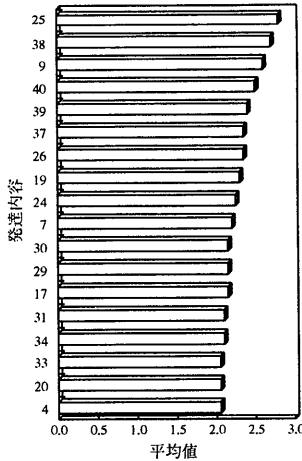
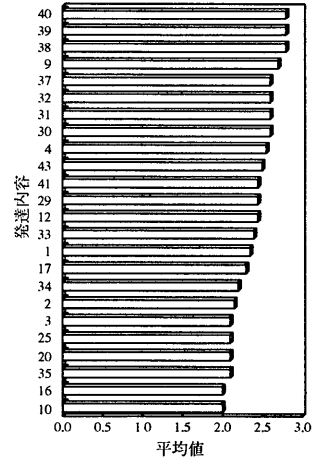


図13 母親(幼稚園)の評価が高い発達内容(2.0以上)



母親(幼稚園)からの期待が高い発達内容(2.0以上)

(3) 園(所)の保育活動に対する意見

保育者や母親は保育に対してどのような要求や意見を持っているのだろうか。図14, 図15は、学校、地域、家庭との関わりで、保育に対する10項目の質問を行なった結果である。

保育者、母親が共に保育に対して強く感じている内容は、no.6, 8, 9である。no.6は「小学校入学後の教育内容に振り回されずに、幼児期の発達を中心にすえた保育に取り組んだほうがよい」という内容である。no.8は「幼児期は、自分の遊びにしっかり取り組む力を育てれば、いろいろな力が結果として身につくので、それで十分と考えた方がよい」という内容である。さらに、no.9は「子どもによって、発達とペース、遊びでの活動の好みなど違うので、就学までにどんなことができるようにしたいか、一人ひとりについて考えていくほうがよい」という内容である。この3点については、保育者と母親との間に見解の食い違いはない。

その一方で、両者間には多少の相違点も見出される。第1点は、共通点として指摘したno.9の平均点が保育者では2.0(かなりそう感じる)を超えているが、母親の場合、1.0(少しそう感じる)を超えた程度にすぎない。母親は、ではその意味で、単なる個別的指導を求めているとは考えにくい。第2点は、当然のことながら、保育者は小学校教育との接続より、違いや独自性に重点を置いて園(所)の保育内容をつくっていくとする傾向が強い。さらに、第3点はno.3, 4に示されるように、遊びの中で育つ力や小学校入学までに育てようとしている力について、保育者はもっと親や小学校に対し具体的に説明したいと考えているが、母親はそのことについてそれ程必要性を感じていないといった点である。

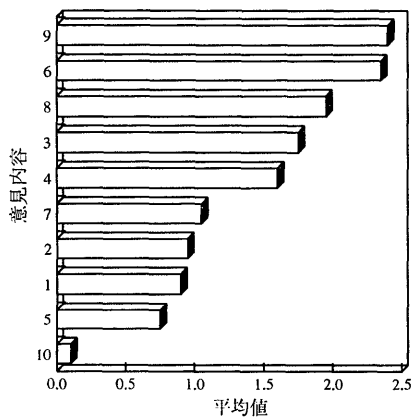


図14 保育に対する全保育者の意見

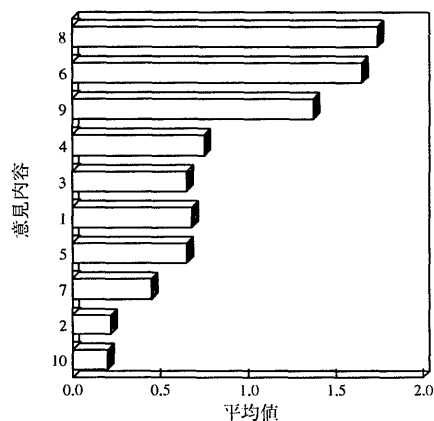


図15 保育に対する全母親の意見

年代別比較でみた場合、20代の保育者は40代以上の保育者と同じく、no.9の「子どもの発達ペースや活動の好みち合わせ、一人ひとりに対する関り」を最も重視している。それに対して、30代の保育者は、no.6の「小学校の教育内容に振り回されずに、幼児期の独自性を中心に保育の在り方を考えていこう」とする傾向が強い。一人ひとりの子どもの個性から考えていくか、枠組みとしての幼児教育の独自性から考えていくかの違いがありそうである。しかし、年代が上になるに伴い、遊びや個別的対応を重視した保育の重要性を痛感する度合いが強くなる様に思われる。母親の場合は、3つのグループ間で大きな違いがみられないが、4年生以上の子どもを持つ母親は、遊びや個別的指導を他のグループほど重要と思わなくなる傾向がある。当然のことかも知れないが、これは母親の幼児期に対する思い入れの度合と関係しているのかもしれない。

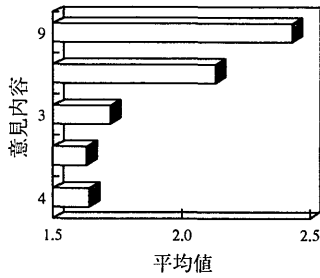


図16 20代の保育者が保育に対して比較的強く持っている意見(1.5以上)

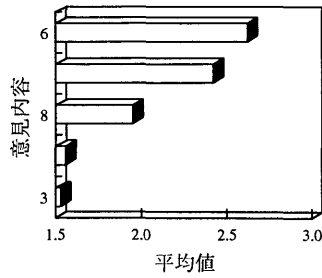


図17 30代の保育者が保育に対して比較的強く持っている意見(同)

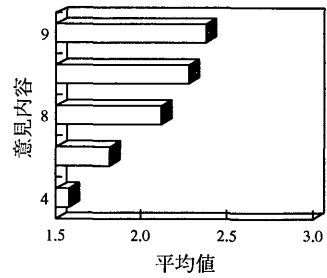


図18 40代の保育に対して比較的強く持っている意見(同)

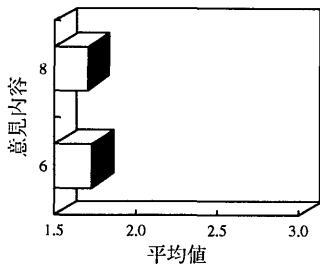


図19 就学前の子どものみを持っている母親が保育に対して比較的強く持っている意見(1.5以上)

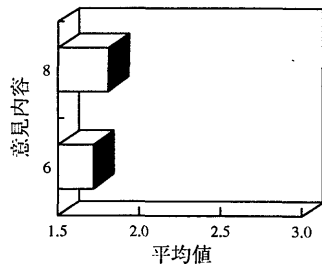


図20 小学校3年生までの子どもを持っている母親が保育に対して比較的強く持っている意見(同)

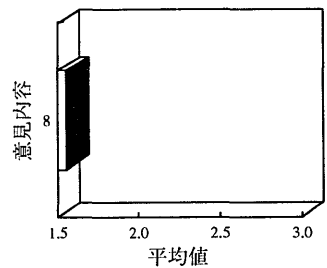


図21 小学校4年生以上の子どもを持っている母親が保育に対して比較的強く持っている意見(同)

(4) 入学後の成績差の原因に対する捉え方

小学校入学後の子ども達の成績格差は何が原因であると保育者や母親は考えているのだろうか。図22, 23にあるように、保育者と母親の考え方に大差はない。両者共に、no. 1, 10, 11, 12をかなり関係していると見做している。no. 1は「いろいろなことに対する興味・関心」、no.10は「自主性や自発性がしっかり形成されているか否か」、no.11は「自

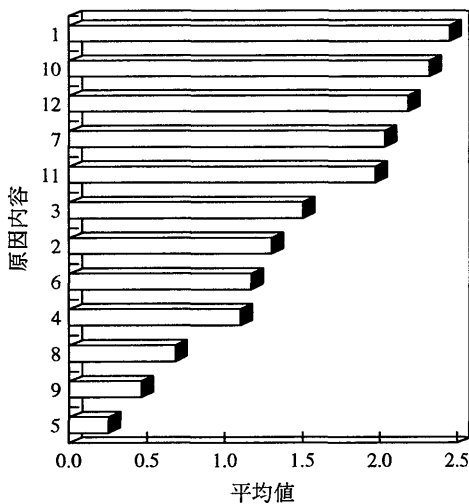


図22 全保育者が考える成績差の原因

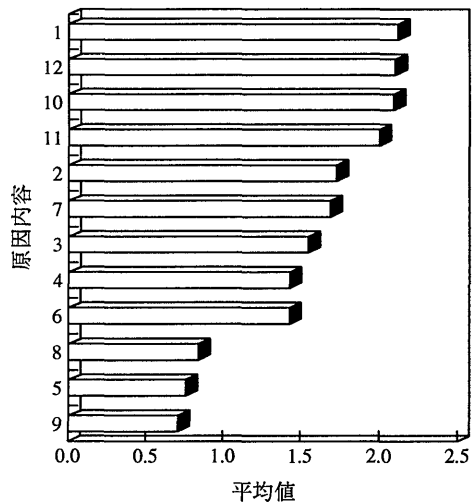


図23 全母親が考える成績差の原因



分を受け入れ認めてくれる友達の有無」であり、no.12は「自分がすることへの自信」である。塾や遺伝的素質が全く原因と見做されていないのは意外である。保育者と母親で多少の違いを見い出すとすれば、保育者は、no.7の教師の指導力を成績格差の主要な一因としてより重視する傾向がみられる点ではなかろうか。

年代別にみても、基本的には保育者と母親との考えに大した違いは見い出せない。保育者の年代が上がると共に、既に指摘した教師の指導力を次第に重視しなくなる傾向があり、主要な原因と見做される上位の項目間の得点差もなくなっていく様である。

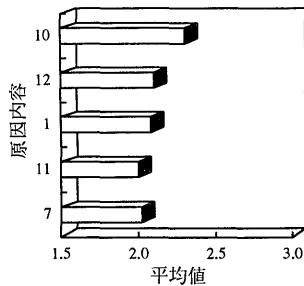


図24 20代の保育者が比較的重視する成績差の原因 (2.0以上)

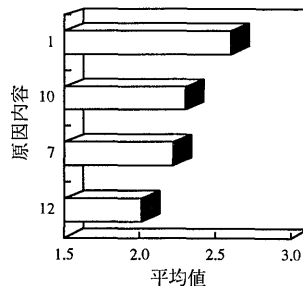


図25 30代の保育者が比較的重視する成績差の原因 (同)

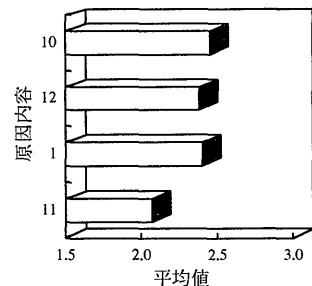


図26 40代以上の保育者が比較的重視する成績差の原因 (同)

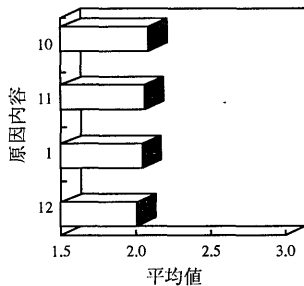


図27 就学前の子どもしかいない母親が重視する成績差の原因 (上位1/3)

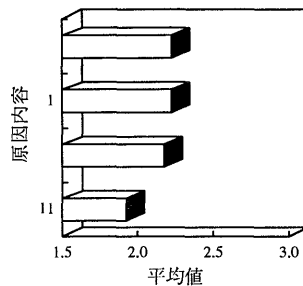


図28 小学3年生までの子どもをもつ母親が重視する成績差の原因 (同)

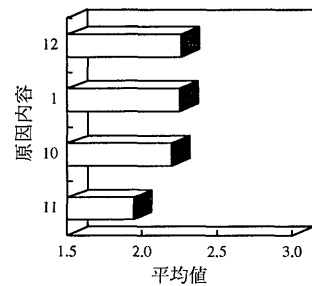


図29 小学校4年生以上の子どもをもつ母親が重視する成績差の原因 (同)

#### (5) 幼小一貫性に対する考え方

幼小のつながりをどのような内容・方法によって見い出そうとするのか、意見の分かれるところである。しかし、図30, 31は、保育者と母親の考え方が非常に類似したものとなっていることを示している。上位3項目は、両者共全く同じものであり、順番まで一致している。no.3は「意欲や態度を育てること」、no.6は「保育者と教師間での子どもの情報交換」、no.5は「体力や運動技能」となっている。順番の入れ替わりが一部あるが、no.4, 1が次にくる程度である。no.4は「保育者が教師の自覚を持って子どもに接すること」であり、no.1は「幼児期の教育内容・方法を小学校教育で取り入れること」である。保育者では小学校教育への取り入れが先にきているが、平均値は1.0を少し上回った程度に過ぎない。具体的には「生活科」とイメージが重なるが、保育者が多少重要と考えている程度にすぎない。ここでも、心情面での意欲や態度が養われることが重要な課題として考えられている状況がみてとれる。

年代別比較でも、保育者と母親の傾向は全く同じである。

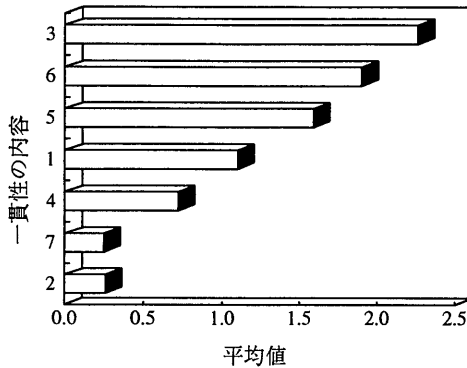


図30 全保育者における幼小一貫性

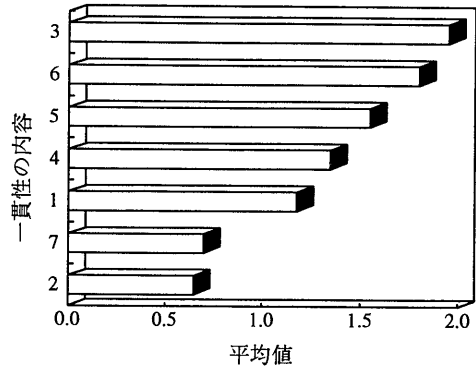


図31 全母親における幼小一貫性

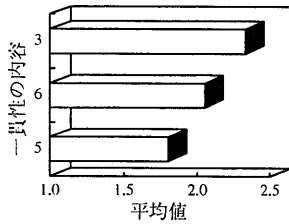


図32 20代の保育者が比較的重視する一貫性 (1.5以上)

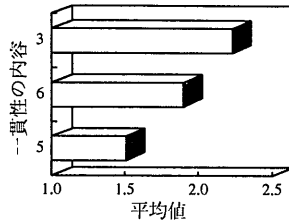


図33 30代の保育者が比較的重視する一貫性 (同)

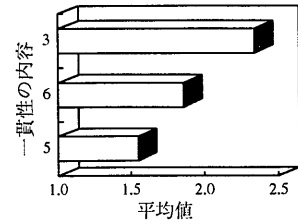


図34 40代の保育者が比較的重視する一貫性 (同)

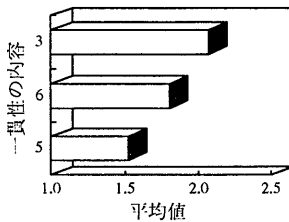


図35 就学前の子どものみを持つ母親が比較的重視する一貫性 (1.5以上)

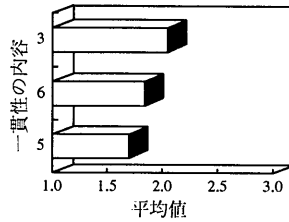


図36 小学校3年生までの子どもを持つ母親が比較的重視する一貫性 (同)

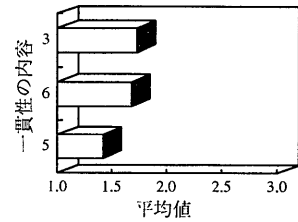


図37 小学校4年生以上の子どもを持つ母親が比較的重視する一貫性 (同)

#### (6) 幼児保育の重点課題に対する考え方

保育における重点課題について、保育者と母親の考えをまとめたものが図38, 39である。平均点2.5以上を含む、no. 2, 7, 1の3項目共、保育者と母親に共通するものである。no. 2は「手指を使って、砂や泥や紙でいろんなものをつくること」、no. 7は「周囲から認められ愛されることで情緒の安定や安心感をもつこと」、no. 1は「身体の動きやバランスをコントロールする運動」である。粗大、微細運動による表現活動や運動と情緒面での安定が共に保育の重点として重視される傾向を示している。さらにいくつかの項目が比較的高い平均値で続いているが、no. 8, 5, 4, 6についても、両者共に共通した項目となっている。no. 8は「失敗を恐れずにチャレンジすること」、no. 5は「決まりや約束を守って集団生活を楽しむこと」、no. 4は「考えをことばで伝えあうこと」、no. 6は「相手の気持ちや要求を理解して受け入れて楽しむこと」である。個々人の課題追求や集団的活動への取り組みをダイナミックかつ組織的に展開するような保育実践ともいえる。

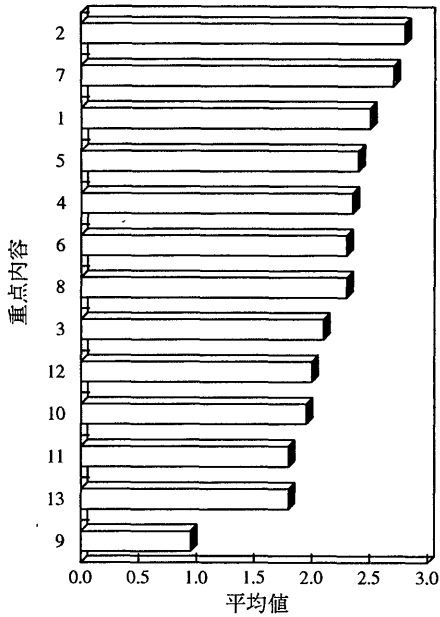


図38 全保育者における保育の重点

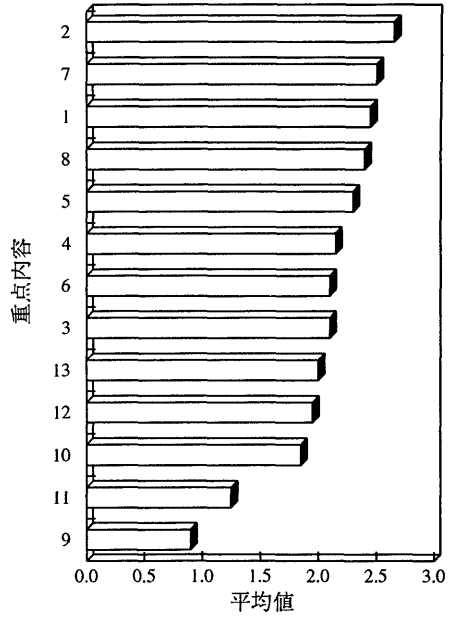


図39 全母親における保育の重点

年代別比較でみた場合、保育者で多少の違いが見出される。共通するno.2（手指、つくる）、no.7（情緒安定）は年代が上がるに従って重視される度合いが高まる傾向にある。それを背景に、20代ではクラスでの相互交渉の活発化、30代は活動的遊びの活発化とクラス集団づくり、40代以上は身体的活動を中心に様々なチャレンジ活動に取り組む、といった多少のニュアンスの違いがでている。

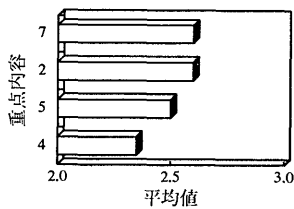


図40 20代の保育者が重視する保育の重点（上位1/3）

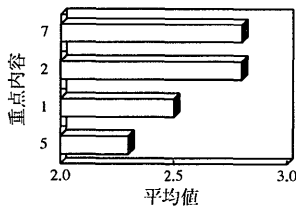


図41 30代の保育者が重視する保育の重点（同）

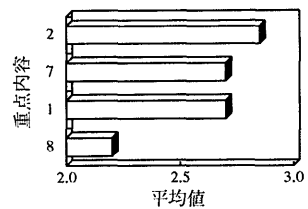


図42 40代以上の保育者が重視する保育の重点（同）

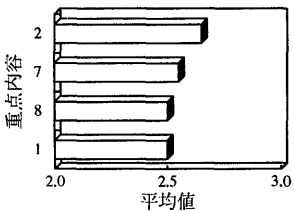


図43 就学前の子どもしかいない母親が重視する重点内容（上位1/3）

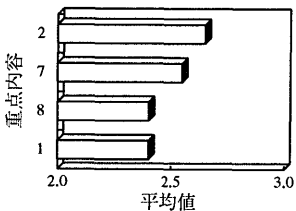


図44 小学校3年生までの子どもをもつ母親が重視する重点内容（同）

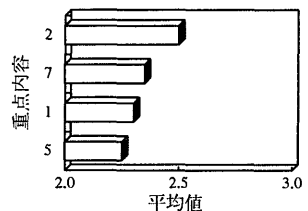


図45 小学校4年以上の子どもをもつ母親が重視する重点内容（同）

## (7) 幼児期の特徴づけ

特徴づけへの回答は、主に幼児の発達特性や活動特性についての判断に対してどの程度共感するかを求めた。図46、47は保育者と母親の特徴づけを示したものであるが、保育者の場合、平均点2.0以上のものは、no. 2, 4, 3, 1の4項目であった。いずれも、かなりそう思うと判断された項目である。no. 2は「具体的知識や生活技能の習得より自分の目的をもって取り組めるかを問題にすべき時期」という判断、no. 4は「子どもの興味を優先して考えるべき時期」という判断、no. 3は「活動の取り組み方での個人差が大きい時期」という判断、no. 1は「発達の目安にこだわる必要のない時期」という判断である。このことからわかるように、保育者は具体的知識・技能よりその子の自発性、興味、個人差を重視しようとしていると考えられる。どちらかといえば、活動に取り組ませる際にどう関わるかが問題となっている。その際に、必要となる特徴づけとみることができる。

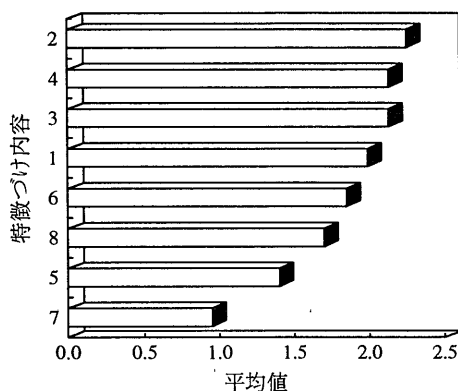


図46 全保育者における幼児期の特徴づけ

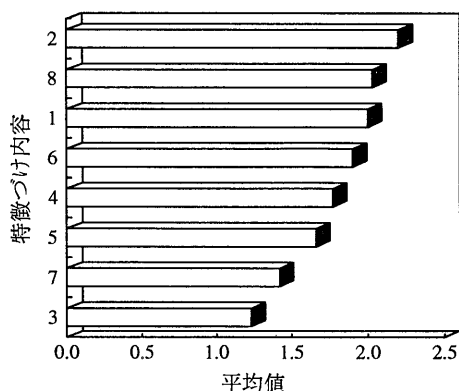


図47 全母親における幼児期の特徴づけ

母親の場合、平均点2.0以上のものは、no. 2, 8, 1の3項目であった。no. 2は「自分の目的をもって取り組めるかを問題にすべき時期」という判断、no. 8は「その子のありのままを受け入れることを優先すべき時期」という判断、no. 1は「発達の目安にこだわる必要のない時期」である。このことから、発達の目安にこだわらず、自発性を大事に、ありのままのその子を受け入れることを重視しようとしている。どう受け入れるべきかを問題にしており、その際の特徴づけを行なっているとみることができる。その意味で、両者の特徴づけは、共通なno. 2を含んではいるものの、視点の違いが込められていると言える。

年代別比較でみた場合、20代と30代の保育者はほとんど同じ傾向を示している。しかし、図48、49、50に示されているように、40代以上になると、活動への取り組みませ方への配慮から、何かを習得させること自体に対して自らを戒める様な特徴づけ（no. 2）が強まる傾向にある。母親の場合、図51、52、53に示されている様に、高学年の子どもをもつのに伴い、no. 8の特徴づけが上位に移行し、no. 6が新たに加わっている。これは、発達の早い遅いにこだわることをやめようとするだけでなく、好奇心や探求心への積極的関与を含んだものとみることができる。保育者と母親という立場の違いが、どこにこだわるかという点での違いをもたらしている。

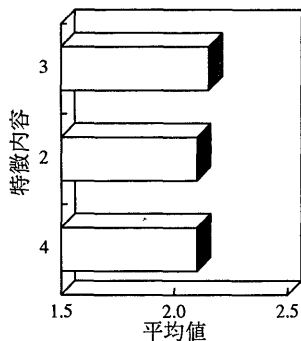


図48 20代の保育者が重視する幼児期の特徴 (上位1/3)

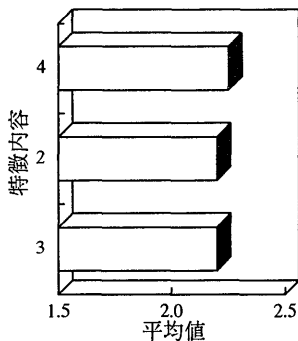


図49 30代の保育者が重視する幼児期の特徴 (同)

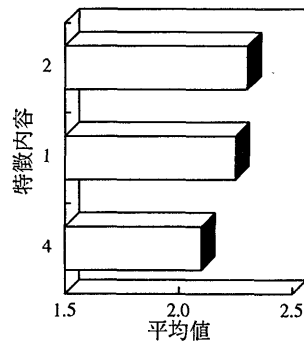


図50 40代以上の保育者が重視する幼児期の特徴 (同)

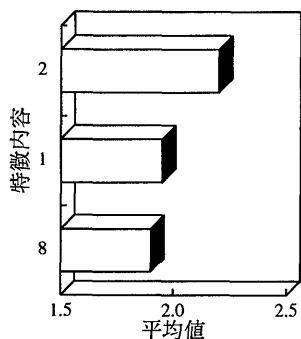


図51 就学前の子どもしかいない母親が重視する幼児期の特徴 (上位1/3)

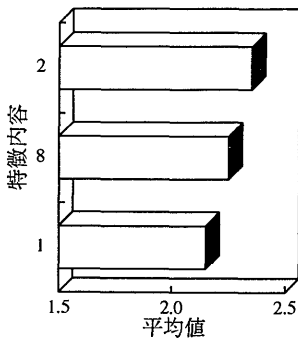


図52 小学校3年生までの子どもをもつ母親が重視する幼児期の特徴 (同)

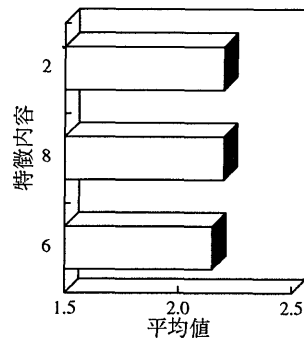


図53 小学校4年生以上の子どもをもつ母親が重視する幼児期の特徴 (同)

#### IV 調査結果のまとめ—あとがき—

今回の調査では、保育者と母親の比較調査を行なった。調査内容は次の7つである。就学までにつけさせたい力、子どもと発達状態の評価、園(所)の保育活動に対する見方、入学後の成績差の原因に対する捉え方、幼小一貫性に対する考え方、幼児期の保育の重点課題に対する考え、幼児期の発達の特徴に対する見方である。

保育者と母親との比較で際立った違いはあまりみられなかった。しかし、就学までにつけさせたい力に関する質問、園(所)の保育活動に関する質問、幼児期の発達の特徴に関する質問等において多少の違いがあることを見い出せた。基本的には、子どもに対する立場、要求の違いが関係していると考えられる。また、保育者、母親の年齢の違いが、今回の質問内容に対する選択傾向で違いをもたらすことも明らかになった。

今後、質問内容、選択肢等を再検討し、小学校教員を含めた3者の比較調査を実施する方向で調査内容等を見直す必要がある。

#### 参考文献

- 1) 井口均「幼児期の教育・保育に対する親、保育者、教員の考え方に関する調査内容の検討」長崎大学教育学部教育科学研究報告 第49号 27-42 1995年